



三田市の地域性

星野, 輝男

(Citation)

兵庫地理, 19:2-23

(Issue Date)

1975-04-30

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90002286>



三 田 市 の 地 域 性

星 野 輝 男

は じ め に

ときどき三田市香下の小宅に出かけるが、ここは三田駅から道のりで5km、いわゆる旧市内だが高燥な緑の土地に空気は澄み騒音や汚染からも縁遠い。芦屋の自宅から35km、自動車で約1時間、大都市圏からこんなに近くに、こんな別天地があるとは本当に意外だった。ここらあたりに三田市の地域性を窺うことができよう。六甲連峯と武庫川の狭隘という自然的障害が都市化の激浪を防いで、未だに田園の景観に溢れた三田市なのである。しかし漸く変貌の時期を迎えようとして北摂ニュータウンの造成も進んでいる。以下の文は「関西学院史学」に“三田市の地域構造”と題して書いたのにいささか手を加え簡略にしたものである。

1

三田市を歴史的に眺めてみると、古くより文化が開けた地方のようである。市内各所より石器・青銅器や縄文式土器などの発見も多く、すでに上古より河川ぞいの山間各地に人が住みついたと思われる。また弥生式土器や古墳となると数も多く、この頃には南部丘陵地帯には集落も発生した如くである。古墳は市内で確認されただけでも百基を越え、農耕関係の出土品も数が多い。大化改新によって水田の分布と村里の統一整備がはかられ、三田・三輪・貴志・加茂・藍・本庄・高平などに正しい地割が生まれた。¹⁾

金心寺こんしんは非業の死を遂げた孝徳天皇の皇子有間皇子の菩提をとむらって建てられたと伝えられるが、²⁾定慧上人（藤原鎌足の長子）によって皇子の所領であった三田の地に創建された。広大な伽藍と寺域は戦国の兵乱によって亡失し、いま天神丸岡にある金心寺は往昔の場所とは違うが、三田の中心部はこの寺の門前町として7世紀の後半にはじまり中世を通して発展をみたのである。³⁾

荘園時代にはもと大神おおみかみの郷であったこの地は、貴志荘・松山荘・小野荘・藍荘・野々倉荘などに分れていたが、高平地区だけはもと羽束郷で摂津多田源氏の荘園であった。

旧有馬郡の中心として三田城ができたのは約600年前で、赤松義祐が足利幕府

からこの地方を治めるように命ぜられ、城を構えた頃からであるとされている。戦国時代に入ってのち、有馬則景・赤松村秀・荒木平太夫・山崎家などの武将がつぎつぎに三田を治めていた。⁴⁾

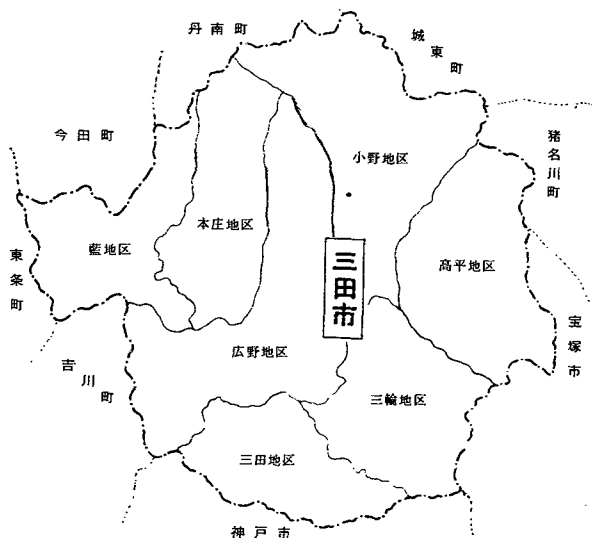
江戸時代に入って、はじめ有馬豊氏・松平重直などの大名が治めたが、寛永10年(1633)に九鬼久隆が鳥羽から転封され、三田藩として明治になるまで13代236年間にわたって九鬼時代が続き、三万六千石の城下町が栄えた。ただ高平地区は多田の高平三千石といわれ、青木一重を初代として寛永3年(1626)以来摂津麻田藩青木氏の所領であった。⁵⁾

明治維新を迎え、明治4年に兵庫県となるまでの間「三田県」として旧陣屋に藩庁がおかれていた。その後、時代の進展とともに各町村の統廃合などをみながら、鉄道の開通などとともに阪神・神戸との交流が進み、三田は次第に都市化の影響を受け今日に至った。⁶⁾

2

三田市は昭和33年(1958)7月1日、兵庫県における20番目の新市として市制を施行しその誕生をみた。その経緯をみるに、有馬郡三田町・三輪町・広野村・小野村それに高平村が昭和31年9月30日に合併して三田町となり、さらに相野町

(藍村・本庄村が合併して相野町を昭和31年3月31日に新設した)をも昭和32年7月18日に合併して、かつての有馬郡の残存地域を一本とした大同団結が成り新しい三田町となった。それが町村合併促進法により人口要件が3万人以上にと規準が引下げられたので、ここに人口33,755人・世帯数6,512・面積211.9km²を以て市



制施行をしたのである。⁷⁾

かつての有馬郡は、まず有馬町と有野村が神戸市に昭和22年3月編入され、ついで山口村と塩瀬村が西宮市に昭和26年4月編入され、さらに八多村・大沢村・道場村が神戸市に同年7月編入されたので、ここに北半が残されて2町6カ村となった。町村合併の気運に乗り合併が考えられ、また神戸市への併合も策せられたが、長尾村のみが神戸市に昭和30年10月15日編入され、残存した町村の前途は憂慮される状態であった。そこに有馬郡一町の構想が実現し、迂余曲折のすえ新三田町が生まれたのであった。⁸⁾

第1表 三田市の成立および周辺町村の推移

年 月 日	範 囲	面 積	摘 要
M 22. 4. 1 明治	有 馬 郡 (2町 12村)	337.15	三田町、三輪村、貴志村、中野村、小野村、本庄村、藍村(以上三田市)湯山(有馬)町、有野村、八多村、大沢村、道場村(以上神戸市)山口村、塩瀬村(以上西宮市)
M 29. 4. 1	(2町 13村)	371.00	川辺郡高平村が有馬郡に編入。
M 35. 5. 1	(2町 14村)	〃	道場村の西部が独立して長尾村ができる。
S 2. 4. 1 昭和	(3町 13村)	〃	三輪村が町制施行し、三輪町となる。
S 18.12.20	(3町 12村)	〃	中野村と貴志村が合併、広野村となる(貴志村の池尻、下深田、上深田、貴志は三田町へ編入。)
S 22. 3.	(2町 11村)	332.55	有馬町と有野村が神戸市に編入。
S 26. 4. 1	(2町 9村)	284.12	山口、塩瀬の両村が西宮市に編入。
S 26. 7. 1	(2町 6村)	224.97	八多、道場、大沢の各村が神戸市に編入。
S 30.10.15	(2町 5村)	211.90	長尾村が神戸市に編入。
S 31. 3.31	(3町 3村)	〃	藍村と本庄村とが合併して相野町となる。
S 31. 9.30	(2町)	〃	三田町、三輪町、広野村、小野村、高平村が合併し、新三田町となる。
S 32. 7.18	(1町)	〃	三田町と相野町とが合併し、三田町となる。
S 33. 7. 1	三 田 市		市制施行、三田市となる。有馬郡廃止。

資料：三田市史

要するに有馬郡の取り残された北半の部分が三田市となった形で、現在は境域も安定し地方自治体として順調な発展を続けているものの、健全な都市構成を考えた時に問題なしとはいえない。それだけ神戸や阪神の都市勢力の影響が大であったわけであろうが、現在の三田市は中心をなす市街地地区がその南端にあり、内陸都市としての形状はいささかの偏跛である。このような三田市の市域は、急

第2表 旧有馬郡の人口・面積

地 域	面 積 km^2	人 口	人口密度
三 田 市	211.90	33,090	156
小 野	42.99	1,819	42
高 平	33.85	2,825	83
三 輪	28.24	9,379	332
田 野	12.83	8,499	662
広 野	38.83	5,074	131
藍 庄	30.49	2,692	88
本 庄	24.67	2,802	114
神 戸 市			
有 馬 野	8.30	3,539	426
有 道 野	30.15	14,696	487
八 多	21.41	3,640	170
大 沢	24.06	2,665	111
長 尾	13.68	1,588	116
西 宮 市			
塩 瀬	24.64	6,812	276
山 口	23.79	4,343	183
合 計	371.00	72,461	195

資料：45年 国勢調査

りに位置して、阪神地域の外縁をなしている。ちなみに市役所の位置は東経135度13分、北緯34度53分である。その四囲をみると、南は神戸市、東は川辺郡と宝塚市、西は美濃郡と加東郡、北は多紀郡に囲まれた内陸にあり、武庫川中流の盆地を中心に展開している。総面積は211.9 km^2 で、県下21市のうち神戸市・姫路市につぐ広さである。その形状は、東西19.3 km 、南北17.8 km のほぼ円に近い形をなしているが、都市的重心は南部に偏している。

地形は北部と東部に高く、北部に虚空蔵山(595.6 m)・峰山(697.7 m)・三国ヶ嶽(648.2 m)・千丈寺山(589.6 m)など、東部に大船山(653.1 m)・羽束山(523.4 m)など、標高500～700 m の丹波高原に属する山々が連なり、西南部は概ね標高300 m までの丘陵台地となって波状の起伏が播州平野に続いている。この山間に武庫川とその支流が流れて、小さな平野や盆地を形成して、この盆地や台地上に多くの集落が発達している。平野は武庫川およびその支流沿いにわずかに開けている程度で、南部の三田盆地が最も広く、ここに三田市の中心をなす三田地区・三輪地区の市街地が立地し、北部に広く背後の農村地域の生活圏を擁している。武庫川は多紀郡丹南町谷山付近に源を発し、市域内の多くの支流を集めて北西から南東に流れ、西宮市・尼崎市を経て大阪湾に注いでいる。かくて市域の西端部

峻な六甲山地を越え、また狭隘な武庫川溪口を通して伸びる大都市の影響力の強さを示すものであるとともに、三田市自体の都市的活動力の微弱さを物語るものであろう。

かくして三田市街地を中心とする半径約10 km の都市圏を考え、旧有馬郡を一体的な地域としてみなすことは時に必要である⁹⁾。この場合、神戸市・西宮市の一部を含み、面積は400 km^2 に近く人口も7万余となる。

3

三田市は兵庫県の南東部にあり、神戸より20 km 、大阪より30 km あ

第3表 県下都市総覧

都市名	市制施行 年月日	面積	人口	人口密度 1平方 km	女100人 につき男
神戸市	明治 22. 4. 1	537.30	1,288,937	2,399.5	97.7
姫路市	明治 22. 4. 1	268.10	408,353	1,523.1	96.1
尼崎市	大正 5. 4. 1	48.95	553,696	11,318.4	103.0
明石市	大正 8.11. 1	47.33	206,525	4,363.5	100.6
西宮市	大正 14. 4. 1	96.48	377,043	3,908.0	100.1
洲本市	昭和 15. 2.11	124.04	44,499	358.7	85.3
芦屋市	昭和 15.11.10	16.07	70,938	4,414.3	92.8
伊丹市	昭和 15.11.10	25.09	153,763	6,128.5	104.4
相生市	昭和 17.10. 1	90.40	40,657	449.7	99.4
豊岡市	昭和 25. 4. 1	162.11	44,094	272.0	90.7
加古川市	昭和 25. 6.15	97.34	127,112	1,354.3	100.3
竜野市	昭和 26. 4. 1	70.31	36,105	513.5	93.5
赤穂市	昭和 26. 9. 1	127.02	45,942	361.7	93.3
西脇市	昭和 27. 4. 1	96.44	37,934	393.3	83.3
宝塚市	昭和 29. 4. 1	101.89	127,179	1,248.2	97.0
三木市	昭和 29. 6. 1	120.04	41,245	343.6	95.2
高砂市	昭和 29. 7. 1	33.53	68,900	2,054.9	101.9
川西市	昭和 29. 8. 1	53.75	87,127	1,621.0	99.4
小野市	昭和 29.12. 1	93.84	37,623	400.9	93.6
三田市	昭和 33. 7. 1	211.90	33,090	156.2	95.2
加西市	昭和 42. 4. 1	150.44	48,354	321.4	93.7

(注) 面積, 人口, 人口密度, 性比は昭和45.10.1 現在

大川瀬地区を流れる加古川の支流の東条川のほかは、ことごとくこの武庫川の流域となっているのである。¹⁰⁾

地質的にみて、三田市域は丹波高原の内でも石英粗面岩の噴出している南部に属し東西走向の断層線が多く、たとえば有馬温泉や篠山盆地の形態などはこの種の断層線の影響を受けている。この高原内には亀岡・福知山・篠山などの断層盆地が介在し、三田盆地もこの断層盆地の一つ

で冲積平野となったものである。三田盆地はもともと水の吐け口の乏しい細長い断層湖盆であったものが、その後の土砂の堆積と武庫川の開析による水の流出とで山間平野に変わったのである。現に3段の段丘がこの盆地に認められる。また豪雨が降れば盆地に集まった水を吐き出し得ず浸水騒ぎを惹き起こし、三田市の災害の一つの原因をなしている。¹¹⁾

気候に関して三田市は、大阪湾の北岸から北へ約20kmの内陸にあり、この間に六甲山が1000m近くの高さで遮えがり、市域内に山地が多く中央部武庫川沿いの三田盆地も標高140mであるので、内陸性気候の様相をかなり明白に示している。

すなわち夏は高温となり最高気温摂氏35度以上¹²⁾に、冬は低温となり最低気温摂氏氷点下11度以下¹³⁾となり、日較差も割合大きく霜氷期間も長い。年平均気温は摂氏13.3度で神戸より2度程低く、とくに冬季は3度前後、夏でも1度前後気温が低い。年間降水量は1500mm内外で神戸より若干多く、とくに5月や8月は30～50mmの差はあるが、それでも水田に必要な溜池は多数分布している。要するに瀬戸内式気候に属しながら、海岸から近距離にも拘らず、かなり内陸的な気候を呈しているということが出来るが、このことは霧霧の発生が多いことにもよく表われている。

三田市は総面積の約8割が山林で占められている。しかし、古くより開墾され林相は浅く原始林は無く、ただ永沢寺国有林のみわずかに杉・ひのき・松・とが・もみなどの巨樹が残っていたが、それも近年伐採されてしまった。そして、ここに生息する生物も、近畿中部のもので、特産種は極めて稀れである。しかし、暖地気候性の山陽側の生物と寒地気候性の山陰側の生物の両地方のものが入り交り、種類は割合に豊富である。現在、900種の植物が天然に自生している。¹⁵⁾

4

三田市の人口は昭和49年9月1日現在で、世帯数8,861、総人口33,920人、男16,523人、女17,397人である。¹⁶⁾これを15年前の市制施行の昭和33年当時と較べて眺めると、世帯数6,868、総人口32,673人、男15,802人、女16,871人であって、出生・死亡の自然増を考えればほとんど停滞の状態にあり、大都市近くの

第4表 地区別人口

(昭和47年10月1日現在)

地区別	区分	世帯数	面積 km ²	人口			人口密度 (1km ² 当り)
				男	女	計	
三田		3,302	12.83	4,165	4,349	8,514	664
三輪		2,628	28.24	4,563	4,843	9,406	333
広野		1,357	38.83	2,740	2,742	5,482	141
小野		399	42.99	937	923	1,860	43
高平		634	33.85	1,390	1,516	2,906	86
藍		639	30.49	1,346	1,417	2,763	91
本庄		646	24.67	1,282	1,365	2,647	107
計		8,605	211.90	16,423	17,155	33,578	158

田園都市の様相をうかがうことができる。

人口分布を地区的にみると第4表の如くであり、三田地区・三輪地区が他に比して著しく集中地であることが判り、三田市の中心市街地を形成していることを

資料：市民課

示している。すなわち三田・三輪地区の市街地に半数以上の17000人が集中し、広野に5000人で、その他の地区は2000～3000人の農村地帯である。しかし、人口密度をみると三田地区・三輪地区ともそれぞれ1km²当り644人、333人で三田市全域では158人となり、決して高い数字ではない。要するに三田市は地方の農村都市でしかないのが現状といえよう。

三田市を集落の面から考えると、中心部の近世九鬼藩の城下町であった旧三田町を除いてもともと市域は三田盆地とその周辺の農村地域より成り立ち、都市近郊園芸農村であり、蔬菜・果物・花卉・植木などの栽培が盛んであった。その中心地をみると、50年前には新地・三輪・高次の現在の駅前通りは全くの田園で道路もない状態であったが、明治32年7月17日福知山線（当時の阪鶴鉄道）の開通により三田駅が設けられて始めて駅前広場から郵便局まで2000mの新道路ができたのである。駅前通りができたのは大正14年であり、さらに昭和3年末より神戸電鉄（当時の神有電鉄）の開通により三田本町駅ができて、この辺りはいよいよ発展をみたのである。新町・桶屋町・三輪明神通りは街道の街村集落として発達したものであった。本町通りの家屋は藩政時代からのものが大部分であった。駅前通りは近年急速に発展するに至ったもので、新地街も大正初年は田園であり、当時は郵便局も郡役所も警察署も本町の中核部である桜の馬場通りに集中していた。それが後に本町通りと京口町の相会する新地方面に移動し、必然的に町の中心がこの方面に移ることとなった。武士屋敷のあった屋敷町は明治期に荒廃したが、昭和になって新地側の発展に平行して高燥住宅地として発展した。¹⁷⁾

現在は、これらの町がすっかり連携し、広い環状道路もできて、三田市の中枢市街地を形成するに至っているのである。しかし、市街地から離れた周辺の各地区では、駅前付近などを除いては見るべき都市的集落のない農村集落が大部分である。

三田市の産業について、第5表の如く国勢調査の産業別人口でその動向をみると、第1次産業が29.7%と比較的高い比率を占めている。しかし、それを昭和35年・昭和40年に較べてみると、急激な減少をみせていることが判る。また、第2次産業は25.1%では4分の1を占めているが、昭和35年・昭和40年に較べてみると、第1次産業とは対照的に急激な増加をみせている。さらに第3次産業は45.2%とかなり高い比率であり、昭和35年、昭和40年に較べてみると僅かに増加を示している。

また三田市の産業について、第6表の如く事業所統計によりその従業者をみると、第1次産業は10人で0.09%にしかならない。第2次産業は従業者4,007人

第5表 三田市産業別人口の推移

産業分類 \ 年 別		35		40		45	
		従業者数	構成比(%)	従業者数	構成比(%)	従業者数	構成比(%)
第一次産業	農 業	6,394	41.6	5,734	36.3	5,037	29.5
	林 業・狩猟業	87	0.6	24	0.2	34	0.2
	漁業・水産養殖業	1	0.0	1	0.0	2	0.0
	小 計	6,482	42.2	5,759	36.5	5,073	29.7
第二次産業	鉱 業	5	0.0	4	0.0	14	0.1
	建 設 業	611	4.0	753	4.8	945	5.5
	製 造 業	2,052	13.4	2,407	15.2	3,335	19.5
	小 計	2,668	17.4	3,164	20.0	4,294	25.1
第三次産業	卸売業・小売業	2,162	14.0	2,429	15.4	2,677	15.7
	金融・保険・不動産業	211	1.4	300	1.9	329	1.9
	運 輸 ・ 通 信 業	935	6.1	1,023	6.5	1,092	6.4
	電気・ガス・水道業	124	0.8	89	0.6	94	0.6
	サ ー ビ ス 業	2,394	15.5	2,608	16.5	3,038	17.8
	公 務	400	2.6	417	2.6	472	2.7
	分類不能の職業	—	—	7	—	12	0.1
	小 計	6,226	40.4	6,873	43.5	7,709	45.2
合 計		15,376	100.0	15,796	100.0	17,076	100.0

資料：国勢調査

第6表 事業所数および従業者の推移

産業分類 \ 年 別		38		41		44	
		事業所数	従業者数	事業所数	従業者数	事業所数	従業者数
農 林 ・ 水 産 業		0	0	2	2	3	10
鉱 業		2	6	2	7	0	0
建 設 業		61	452	80	707	105	920
製 造 業		157	903	167	2,008	202	3,087
卸 売 ・ 小 売 業		676	1,604	701	2,031	738	2,450
金 融 ・ 保 険 業		29	164	25	205	22	245
不 動 産 業		9	51	18	62	19	72
運 輸 ・ 通 信 費		11	176	17	290	31	577
電気・ガス・水道業		6	42	10	66	11	64
サ ー ビ ス 業		368	1,838	383	2,323	399	3,156
計		1,319	5,236	1,405	7,701	1,530	10,581

で37.87%を占めており、その内容は製造業が3,087人と圧倒的である。第3次産業は6,564人で62.04%を占めており、その内容はサービス業の3,156人、ついで卸小売業の2,450人が圧倒的に多く、これら2業種で85%を占めている。

これらを第7表の如く兵庫県下の各都市と較べてみると、第2次産業・第3次

第7表 兵庫県各都市の産業別従業者比

市 名	第1次産業	第2次産業	第3次産業	第3次産業
				全人口
神戸市	0.1	35.4	64.5	29.3
姫路市	0.2	49.2	50.6	25.2
尼崎市	0	56.5	43.5	18.3
明石市	0.1	55.3	44.6	18.9
西宮市	0.1	38.2	61.7	16.3
洲本市	0.5	34.8	64.7	27.1
芦屋市	0.2	14.9	84.9	14.2
伊丹市	0.1	62.7	37.2	15.5
相生市	0	67.1	32.9	16.5
豊岡市	0.6	32.6	66.8	29.7
加古川市	0	52.9	47.1	18.1
竜野市	0.8	52.9	46.3	15.8
赤穂市	0	54.3	45.7	16.3
西脇市	0	58.8	41.2	20.8
宝塚市	0.2	35.7	64.1	17.2
三木市	0	52.2	47.8	17.6
高砂市	0	65.0	35.0	18.2
川西市	0.1	44.4	55.5	13.8
小野市	0.1	59.1	40.8	15.0
三田市	0.1	38.3	61.6	20.3
加西市	0.1	65.9	34.0	11.3

資料：44年兵庫県事業所統計

産業の比率がかなり高いことが判る。

この点、神戸市・

姫路市・洲本市・豊岡市・宝塚市と並ぶもので、第3次産業の比率の高いことは都市としての三田の特色をよく示している。

三田市の農業は、水田農業が中心でとくに特徴的なものではなく、この点近隣の三木市・加西市などと似た状態といえる。耕地面積は2,782haであるが、この中で水田が2,613haと¹⁸⁾94%を占めている。

穫状況をみると第8表の如くであり、米が圧倒的に多く、蔬菜は各地で作られ地域的な偏りは余りない。三田の米は良質の酒米として知られていたが、近年生産量は漸減の傾向にある。著しいのは、10年前には2,000t近く生産された麦類がその1割以下の量となって激減の一途を辿っていることであろう。トマトは高平・広野・三輪の地区に多く、レタスは山間冷涼地の小野・高平地区に多く、イチゴは三輪・広野地区に多い。その他として、椎茸は高平地区に偏っており、クリは山間地方に散在し、お茶は母子付近の特産となっている。

第8表 主要農作物収穫状況

品 名	作付面積	収穫量
水 稲	2,100	8,110
麦 類	9	18
い も 類	33	413
ト マ ト	13	653
イ チ ゴ	22	363
白 菜	12	352
大 根	25	942
レ タ ス	81	1,100
ピーマン	13	481

単位：耕作面積 ha 収穫量トン
資料：第1次兵庫農林・水産統計年報
昭和46年

畜産は乳牛・肉牛が主で、ブタ・ニワトリは僅かであり、牛の飼育状況は第9表の如くであり、広野・本庄地区にやや多いが、全般として各地区に分散してみられる。肉牛は三田肉として聞えており、酪農も一時隆盛の域に達したが、しかし戸数も頭数も減少の傾向にあり、現在は最盛時に較べると3分の1以下となっている。

林業は建築用材・薪炭・竹材のほか、マツタケの産地として関西有数の土地であったが¹⁹⁾これも近年の減少が著しい。

三田市の工業は、市制施行当時まではみるべきものが無かった。しかし、昭和34年に工場誘致条例を議決し、昭和35年より積極的な工業誘致の政策が推進され、昭和37年には通産省の工場適地指定を受けた。これらの指定工場は重化学工業に偏しており、とくに三菱電機の進出とプラスチック機械の組合による工業団地計画は注目されるべきものであった。しかし、時代の経済環境の影響もあって、三菱電機は規模を縮小し、市街地西方の三輪と広野にまたがる地域に農地約20 ha を買収して造られた工業団地も当初の計画を変更せざるを得なかった。²⁰⁾

三田市の工業の現状を工業統計より地区的に眺めてみると第10表の如くであり、従業員20人以下の小規模工業事業所が81%を占めており、木材・木製品・食品の比重が依然高く、機械・金属・電機・自動車部品が主をなし、その他は僅かである。それでも純然たる農村都市であった頃に較べると、事業所・従業者数・製造品出荷額とともに格段の発展をとげたものというべきであろう。

三田市の商業は、第11表の如く商業統計調査結果でみると、小売業が80%を占めており、食料品・家具類・衣類が主である。これらを県平均と較べてみると、1店当り売場面積は82.3 m^2 と6割も広く、従業員1人当り売場面積も24.5 m^2 と

第9表 乳牛・肉牛の頭数

地区	乳 牛		肉 牛	
	戸数	頭数	戸数	頭数
三田	34	374	54	79
三輪	23	157	126	198
藍	30	223	104	159
本庄	40	447	125	267
広野	97	1052	187	418
小野	32	134	110	183
高平	35	165	162	240
計	291	2552	868	1554

昭和45年 三田市農林課

第10表 工業統計

	工業 事業所数	(内従業員 20人以上)	従業者 人	出荷額 万円
藍本・相野	17	(3)	389	236,381
広野	37	(15)	1,224	1,267,305
高平	17	(0)	28	2,688
小野・小柿	19	(1)	205	49,080
三輪北	21	(8)	1,132	1,156,077
三輪南	18	(2)	143	90,486
三田	26	(1)	156	31,621
計	155	(30)	3,277	

昭和48年 三田商工観光課

同様6割以上広いが、 m^2 当りの年間販売額は27万円と県平均7割しかない。しかし市民1人当りの販売額は290,400円と4%程多くなっている。要するに、地方都市の在地的性格がよく示されているといえよう。

商業の中心地は、もとは旧三田町の本町通り、

新町・桶屋町であったが、国鉄・私鉄の両駅が設けられた旧三輪町高次の駅前通りが新しい商店街として次第に発展をとげて、現在のように活況を呈するに至ったのである。

第11表 商業統計調査集計結果表

三田市の交通は、

南北に縦貫する国鉄福知山線(市域内14.5km)が大動脈であって、大阪・丹波方面への主要ルートとなっている。そして神戸方面へは神戸電鉄(市域内2.3km)とバス、また広い市域内は国鉄のほかは私バス網(神姫バス86.3km)が最

		商店数	従業者数	年間販売額 万円
総計		708	2,565	1,288,953
卸売業計		38	287	257,819
内 訳	一般卸売業	32	279	257,819
	代理商仲介業	6	8	—
小売業計		670	2,278	1,031,134
内 訳	各種商品小売業	1	×	×
	織物・衣類・身まわり品	81	327	169,542
	食料品小売業	230	642	297,260
	飲食店	98	318	56,069
	自動車・自転車小売	20	139	95,594
	家具・建具・じゅう器	83	316	165,388
	その他小売業	157	536	247,281

昭和47年5月1日現在

も重要な手段となっているが、近年自動車の発展によって交通形態は多少変化したものと思われる。

交通の中心をなすのは何といっても三田駅である。三田駅を中心とする旅客数は年間約630万人で、その内訳は国鉄340万人(54%)、神戸電鉄110万人(17%)、²¹⁾バス180万人(29%)である。

このように旅客運輸の主力をなすものはやはり国鉄福知山線である。第12表の如く、三田・広野・相野・藍本の市内4駅で1日平均18,974人をさばっている。

第12表 三田市内国鉄乗降客数(1日平均)

年別 駅別	40		45		指 数(40年=100)	
	乗	降	乗	降	乗	降
三 田	6,686 (5,028)	6,737 (5,028)	6,084 (4,453)	6,284 (4,453)	91 (89)	93 (89)
広 野	1,445 (1,153)	×	1,195 (943)	×	83 (82)	×
相 野	2,263 (1,992)	×	1,812 (1,488)	×	80 (73)	×
藍 本	393 (304)	×	296 (234)	×	75 (77)	×
計	10,787 (8,477)	10,838 (8,477)	9,387 (7,118)	9,587 (7,118)	87 (84)	88 (84)

注：()内は定期客で内書き ×は不明 資料：三田市政要覧

旅客のうち定期客が14,236人で定期外は4,738人であるが、旅客数は年を追って減少してきており、これは主として定期客の減少によるのである。このことは第13表の市内国鉄各駅旅客運輸状況の年次変

化をみればより明らかであろう。定期外旅客の増加が各駅の一般的傾向であるが、定期客は漸減している。これは自動車交通の発達が影響しているものと考えられる。しかし、それにも拘らず国鉄福知山線は三田市にとって内外ともに重要な交通の大動脈であることに変わりはない。

第13表 市内国鉄各駅別旅客運輸状況(乗車人員)

区分		年次	昭 42	43	44	45	46	47
総 数	定 期		3,367,706	2,878,447	2,672,597	2,536,198	2,411,906	2,298,771
	定期外		757,292	809,924	830,475	873,303	942,033	945,736
三田駅	定期外		2,093,502	1,763,786	1,635,760	1,564,018	1,512,750	1,470,179
			533,790	571,915	593,375	627,370	686,055	675,961
広野駅	定期外		425,399	375,489	348,284	338,678	311,559	299,310
			88,163	93,249	89,188	90,961	95,367	94,925
相野駅	定期外		728,609	635,484	596,075	544,961	494,233	449,689
			113,876	123,991	126,629	130,887	135,055	148,876
藍本駅	定期外		120,196	103,718	92,478	88,541	93,364	79,593
			21,463	20,769	21,283	24,085	25,556	25,974

資料：国鉄各駅

神戸電鉄(運輸回数1日80回)の1日平均乗降客数を三田・三田本町・横山の

3 駅でみると第14表の如くで6,184人となっており、国鉄に較べて3分の1以下でしかない。これは市域の南端部を神戸方面に走る路線であることが大きな理由であろう。ただ年次変化がほとんど無く横ばいの数字であるのが注目される。

第14表 神戸電鉄乗降客数（1日平均）

年別 駅別	40		45		指数（40年=100）	
	乗	降	乗	降	乗	降
三 田	900 (788)	815 (677)	1,858 (1,160)	1,707 (980)	48 (68)	48 (69)
三田本町	419 (300)	574 (387)	386 (242)	553 (384)	109 (124)	104 (101)
横 山	1,879 (1,119)	1,776 (1,080)	798 (686)	882 (770)	235 (163)	201 (140)

注（ ）は定期客で内書き

資料：神戸市・三田市統計書

バス交通は、阪急バスもあるが市域内ではほとんど神姫バスが主力をなしている。前述の如く神姫バス（運行回数 109、停留所数 130）が交通機関の中で

占める役割はかなり大きいものがある。第15表の如く1日平均で5,000人近い旅客の輸送を受持っているが、現在の条件下ではいささか飽和状態にあるということができよう。

第15表 市内私バス運輸状況

これらの公共的
交通機関に対して、
市内外の交通を近年大きく補っているものが自動車交通であろう。その
実態を知ることは
困難であるが、第
16表の如く自動車

区分 年次	営業 キロ数 (km)	駅 数 (個所)	一 日 平 均			
			運行回数	運 転 キロ数	乗 車 人 員	
					総 数	内定期分
昭 44	84.7	120	106	3,679	4,516	1,471
45	85.2	127	111	3,727	4,601	1,482
46	86.7	130	109	3,672	4,932	1,742
47	86.3	130	109	3,670	4,693	1,683

資料：神姫バス三田営業所

台数の年次変化をみると近年の著しい増加の姿がうかがわれ、ここよりかなりの自動車交通を予想することができよう。

三田市の道路は国道176号線（大阪・福知山線）が大動脈であって、大阪方面への連絡はこれが唯一の幹線である。この道路は宝塚市を經由しており山間を縫って武庫川の狭隘部を通っているの代りものがない。従って宝塚に近づく程輻輳し路面状況は混雑している。神戸方面へは神戸・三田線で結ばれているが、これも神戸に近くなると混み、鈴蘭台あたりからの停滞は近年の問題である。周辺地域へは、主要地方道西脇線・三田城東線などによって連絡されているが、市域内

第16表 市内自動車台数

(単位 台)

年次	車種	乗 用 車		トラック (含三輪)		特 殊 自 動 車	軽自動車	バ ス その他	計
		普 通	小 型	普 通	小 型				
昭 44	44	10	2,697	264	2,290	65	2,334	73	7,733
	45	13	3,057	305	2,305	73	2,567	68	8,388
	46	18	3,808	338	1,633	123	2,843	58	8,821
	47	23	4,541	397	1,770	146	3,233	バス 33	10,143

資料：摂津財務事務所・市税務課

の道路状況は広域な山間部をかかえているので無理もないが、決して良好な状態とはいえないものである。

しかし、近年この交通事情に大きな変革が訪れようとしている。それは中国縦貫自動車道の開通であり、近畿自動車道舞鶴線の計画であり、さらに第二六甲トンネルによる神戸・三宮との時間短縮の計画である。中国縦貫道路ができ北神インターチェンジが設けられることによって三田市は、大阪方面にもう一つの大動脈が得られることとなり、また丹波・但馬方面への中継基地としての有利さを一段と確保できることとなろう。なお第二六甲トンネルの実現によって神戸・三田間は30分圏内に入ることになり、ここに大阪・神戸との連絡がより密接になることが期待される。国鉄福知山線は現在単線で所要時間も距離の割に要しているが、三田・宝塚間の複線化計画も進んでいる。また神戸電鉄の増強計画もあり、これらによって神戸・大阪から近距離にあり阪神地域の外縁部にありながら、山間の地方都市でしかなかった三田市も、阪神都市圏とより濃密な交流を得ることとなろう。

5

以上是三田市について地誌的に概観し静態的にその現状を眺めたのであるが、現在三田市はその立地と環境の諸条件よりさまざまな行政的計画の中において独自の役割をもつものとして位置づけられている。これらをさしおいて三田を語ることは現実を無視するという非難を免れ得ないであろうし、現代の地域社会においては地域の交流や外部的影響力を考慮に入れずして、地域の本当の姿を知り得ない。それ故、ここに三田市をとりまく将来計画についていささか眺めてみることにとする。

まず、近畿圏整備計画において、三田市は近郊整備区域に用途づけられ阪神都

市圏の一環として考えられている。すなわち、京阪神都市圏の中心部からおよそ50kmの圏内にあり、京阪神都市圏と密接な関連があり、計画的に市街地化する必要があり、産業・人口の集積が可能である地域とされているのである。大都市圏の拡大による急速な市街化に対処するため、都市整備の必要が要求されて近郊整備区域が考えられている。近畿圏基本整備計画²³⁾によると、「西神戸・北摂丘陵地・奈良盆地等の近郊地域の外周部においては、未開発の地域がかなり残されているが、今後無秩序な団地スプロールの生じるおそれがあるので圏内他地域との連けいを考慮し、住宅のはかに生産・流通・研究・教育等の都市機能を有する独立性の強い大規模都市開発を計画的に促進する」というのである。三田市はこのように大都市圏の拡大に伴う宅地開発・工業団地の遠隔化という課題の中で、極めて高い開発潜在能力を有するものと位置づけられているのである。

つぎに阪神都市圏における三田市の役割を、県勢振興計画²⁴⁾によると、「近郊地域については臨海部の既成市街地から分散する人口・産業を適正に受け入れる体制を整え、恵まれた自然と豊かな生産緑地との調和に留意しつつ、計画的な市街地開発を促進する。そのための拠点として、住宅・工場・業務地・研究学園などを有機的に結びつけたニュータウンを三田地区および神戸市西神地区に造成する」としている。このように三田市の役割は、これまでの阪神地区との結びつきを生かしながら阪神都市圏の臨海地帯の過密化と膨脹に伴ってのその流出を受け入れること、自然を生かしたニュータウンと、文化拠点や集約的な工場団地などを組み合わせた核心都市を形成することである。

さらに三田市の将来とるべき基本的方策に関しては、三田市総合計画基本構想²⁵⁾によると次の如くである。「三田市は大都市近郊に位置しながら地形的障害や交通条件から、都市化の影響はあまり受けず、久しく内陸盆地としてとり残されてきた。しかし、ここ数年来社会経済上の急速な進展に伴ない、とくに中国縦貫自動車道や南部丘陵地における北摂ニュータウンの建設を契機に新たな発展へ、広大な面積を生かした望ましい地域としての新しい都市づくりの期待は大きい。またそれだけに多くの政策課題をかかえている。基本構想の目標年次はおおむね昭和65年とし、その想定人口は20万人とする。土地利用は市域全体の均衡と調和のとれたものとし、三輪地区南部より相野地区中心部を結ぶ地帯を境界に、南部市街化区域およびその周辺と北部および西部農村区域に区分して、武庫川沿岸地帯は重要な緑地地帯とする。南部市街化区域およびその周辺は商業業務・レクリエーション・研究学園などの施設・機能と結びついた特色ある市街地形成地区とし、周辺の農地は生産緑地として保全し高度かつ多様な自然と文化の環境をつくり出

す区域とする』と概略このように述べられている。

これらの大きな展望の中にあって、現在の三田市にとって最も具体的であり大きな関連のあるものは北摂ニュータウンの計画である。北摂ニュータウン計画の目的は近畿圏整備計画・兵庫県の県勢振興計画および神戸市・三田市の総合基本計画に基づく北摂北神総合開発計画により、阪神間に激増する住宅宅地の需要を緩和しつつ、背後地丹波但馬地域開発の拠点とすべく大規模な住宅地・工業団地を一体的にニュータウンとして三田市に建設することである。

北摂ニュータウン計画の概要は、三田市南西部の丘陵地帯に兵庫県と日本住宅公団が住宅地区にあわせて工業団地も配置したいいわゆる「職住近接方式」の団地を地元三田市と協力して建設するのである。これらと併せて周辺農業地帯の改良事業、三田既成市街地の都市改造などを行うことによって、新開発と既存社会との調和のとれた総合開発を目指している。造成計画は、3住宅団地・1工業地区にセンター用地・教育・医療・交通・公園その他研究学園などの公益公共の施設用地を含めて、総面積は1,244²⁶⁾ha、計画人口は128,000人、戸数は3,500戸で工場は40～60社を予定し、昭和58年入居完了としている。3つの住宅団地のうち南地区は国鉄三田駅・神鉄横山駅に2～3km、中央地区は国鉄広野駅に2～3kmと近接し、中央区の西に隣接して西地区があり、これら3住宅団地の北方に北地区の工業団地が配置されている。その詳細は第17表の如くであるが、その性格は阪

第17表 北摂ニュータウンの概要

地区 区分	北摂南地区	北摂中央地区	北摂西地区	北摂北地区 (工業団地)	合 計
施 行 者	兵庫県	日本住宅公団	兵庫県	日本住宅公団	
計画面積	339ha	603ha	159ha	143ha	1,244ha
計画人口	42,000人	70,000人	16,000人		128,000人
計画戸数	約 35,000戸			40社～60社	
住 区 数	5住区	8住区	2住区		15住区

神都市圏の動向によって規定され、また三田市域内であるので既成市街地との機能分担も問題となるであろう。またこの点については、北摂ニュータウンの南部につづく神戸市北部の北神ニュータウンの住宅団地群との関係も微妙なものがある。

北摂ニュータウンに伴う整備事業として国鉄福知山線の複線・電化が決定され、ニュータウン乗入れの新線も予定されている。また神戸電鉄の有馬口～三田間の

複線化・輸送増強計画も併行して予定されている。公共公益事業として青野ダム（上水道）の建設、広域下水道の建設、河川改修、教育施設（小学校15・中学7・高校5）なども考えられている。道路も、既に述べた中国縦貫自動車道・近畿自動車道舞鶴線のほか、三田市北部からニュータウン内を南下し神戸に抜ける西神線、ニュータウンと三田駅を結ぶ幅員28mの幹線道路の三田幹線などが計画されている。

6

ひるがえって三田市の現況を考えてみるのであるが、大部分は既に地誌的概観において触れたところであるので、問題をしばって検討したい。

三田市は町村合併促進法によって誕生したいわゆる新市であるので、いささか人為的な行政的市域をかかえこんだ弱い成立基盤をもっている。南は六甲山、東は武庫川の狭隘部という地形的障害に加えて、周辺部に山間の広い農村地域を擁して、交通事情は余りにも不備であった。しかし、このことが一方では都市化の強烈な怒濤の波に圧倒されることを防いで、大都市の近くにありながら田園都市の景観を保ち地方都市の在町性格から脱し得ずして今日に至った理由ともなっている。すなわち大阪・神戸から近距離にあり、当然阪神都市圏の一部となるべき運命におかれながら、ベッドタウンにはなり切れなかったのである。

旧有馬郡の残存した北半を市域とし、中心市街地の三田・三輪地区がその南端に位置することは、都市構成としても都市生活圏としてもかなり不自然な要素をもっていることは否定できないであろう。現に旧有馬郡内の交流はかなり強く、神戸電鉄の域内流動人口は87%で、北摂北神ニュータウン計画を考えても神戸市の都市勢力の北進が強く感じられる。²⁷⁾

従来の三田市は二重構造的な都市性格で、兵庫県下でいえば姫路市・洲本市・豊岡市と相似した都市であった。阪神都市圏にきわめて近距離であることを考えれば奇異の感もあるが、既述の如く立地条件がかかる結果をもたらしたものと考えられる。すなわち地方都市三田の求心力と大都市の遠心力のバランスの中に三田市は存立したものといえる。

三田市は長らく結果として停滞的な様相を呈して今日に至った。このことは市制施行以来の人口の推移をみることによって明らかであろう。第18表にみる如く、市制施行以来さして増加もせぬかわり過疎的減少もみられないのである。このことはごく最近の人口推移をみても同様で、第19表の如く昭和46年以来33,000人台の人口を保っており、女が男より多い点も変りがない。また人口動態をみても、

第18表 人口の推移

(注) 昭和35.40.45年は国勢調査
その他は10月1日現在の推計

年度	区分	人 口			世帯数	自 然 動 態		社 会 動 態	
		総 数	男	女		出 生	死 亡	転 入	転 出
昭	33	32,673	15,802	16,871	6,868	527	314	1,075	1,193
	34	32,566	15,789	16,777	6,819	594	276	1,028	1,445
	35	32,528	15,794	16,734	6,726	505	248	1,135	1,467
	36	32,392	15,738	16,654	6,883	486	272	1,108	1,415
	37	32,266	15,670	16,596	7,014	480	273	1,185	1,519
	38	32,104	15,584	16,520	7,108	433	249	1,146	1,489
	39	32,395	15,741	16,654	7,285	444	281	1,716	1,580
	40	32,265	15,582	16,683	7,064	478	253	1,314	1,546
	41	32,237	15,648	16,589	7,426	328	279	1,268	1,542
	42	32,258	15,665	16,593	7,503	479	275	1,390	1,470
	43	32,405	15,763	16,642	7,598	479	250	1,463	1,518
	44	32,644	15,926	16,718	7,860	496	266	1,609	1,638
	45	33,090	16,135	16,955	7,743	513	256	1,665	1,645
	46	33,403	16,364	17,039	8,377	573	253	1,873	1,597
	47	33,578	16,416	17,162	8,605	582	272	1,533	1,838
	48	33,754	16,443	17,311	8,723	593	266	1,593	1,744

資料：市民課

第19表 最近の人口推移

資料：市民課

年 月	世帯数	人 口	男	女	年 月	世帯数	人 口	男	女
昭46. 1	8,144	32,976	16,125	16,851	昭47. 11	8,619	33,545	16,393	17,152
	2	8,173	33,045	16,158		12	8,620	33,544	16,376
	3	8,232	33,112	16,205		48. 1	8,635	33,574	16,398
	4	8,260	33,228	16,258		2	8,643	33,570	16,407
	5	8,296	33,255	16,281		3	8,656	33,518	16,389
	6	8,312	33,271	16,290		4	8,668	33,561	16,384
	7	8,350	33,349	16,338		5	8,685	33,599	16,397
	8	8,364	33,371	16,354		6	8,706	33,651	16,417
	9	8,377	33,403	16,364		7	8,700	33,657	16,400
	10	8,386	33,431	16,371		8	8,719	33,748	16,445
	11	8,418	33,499	16,403		9	8,723	33,754	16,443
	12	8,430	33,539	16,419		10	8,742	33,754	16,453
47. 1	8,441	33,579	16,448	17,131	48. 1	8,753	33,748	16,461	17,287
	2	8,467	33,562	16,426		12	8,750	33,742	16,447
	3	8,499	33,473	16,365		49. 1	8,750	33,711	16,420
	4	8,555	33,475	16,341		2	8,768	33,735	16,437
	5	8,561	33,486	16,337		3	8,768	33,727	16,442
	6	8,584	33,539	16,370		4	8,809	33,793	16,454
	7	8,587	33,554	16,388		5	8,832	33,821	16,472
	8	8,583	33,544	16,395		6	8,837	33,832	16,479
	9	8,605	33,578	16,416		7	8,859	33,889	16,495
	10	8,619	33,581	16,424		8	8,861	33,920	16,523

第20表 最近の人口動態

資料：市民課

年月	自 動 動 態			社 会 動 態			人口増減
	出生	死亡	増 減	転 入	転 出	増 減	
昭47. 7	49	26	23	101	109	-8	15
8	49	19	30	112	152	-40	-10
9	58	16	42	117	125	-8	34
10	48	22	26	119	142	-23	3
11	48	30	18	89	143	-54	-36
12	52	20	32	90	123	-33	-1
47年計	582	272	310	1,533	1,838	-305	5
昭48. 1	61	24	37	116	123	-7	30
2	38	22	16	122	142	-20	-4
3	59	29	30	215	297	-82	-52
4	41	19	22	224	203	21	43
5	46	25	21	160	143	17	38
6	49	20	29	129	106	23	52
7	54	23	31	116	141	-25	6
8	53	15	38	141	88	53	91
9	44	17	27	72	93	-21	6
10	46	28	18	118	136	-18	0
11	43	34	9	121	136	-15	-6
12	47	23	24	119	149	-30	-6
48年計	581	279	302	1,653	1,757	-104	198
昭49. 1	58	27	31	79	141	-62	-31
2	45	21	24	108	108	0	24
3	62	28	34	201	243	-42	-8
4	39	40	△ 1	269	202	67	66
5	43	22	21	143	136	7	28
6	44	23	21	110	120	-10	11
7	52	32	20	119	82	37	57
8	48	19	29	109	107	2	31

第20表の如く、自然増が流出口を補ってほぼ停滞で現状維持という姿を保ってきたのである。

三田市の都市としての成長力は微弱ではあったが、地方中心としての求心性はかなり強く、都心部の三田・三輪地区は順調に発展したのである。しかし、都市としては広い市域をかかえて無理もないが、近代都市の要件に欠ける点は少なくなかった。いま1つの指標として上水道をみるに、第21表の如く給水人口は19,800人、給水戸数4,199戸で、全人口の6割に達しない。こ

れは第22表の5ヶ所の簡易水道を加えても7割5分であって、あとは井戸その他によって自給しているのである。青野ダムの完成により大原地区の一部がその恩恵を受けるが、とも角三田市の都市的形態はこの上水道の普及状況によってもよく示されているであろう。

要するに三田市の現況は、三田・三輪の市街地を中心とした三田盆地に、その周辺の広い農村地域を擁して、過疎にはならない代りに都市的な発展を大きく望

第21表 上水道施設の現況

(昭和49年3月末現在)

区 分	上 水 道			
施 設 名 (水 系 別) ＜創 設＞	合 計	古城浄水場 (武庫川) ＜S12.11.1＞	下山浄水場 (武庫川) ＜S42.12.26＞	山田浄水場 (山田川) ＜S43.12.8＞
給 水 能 力 m^3/B	8,800	3,000	1,200	4,600
給 水 人 口	19,800			
給水戸数(戸)	4,199			

資料：水道課

第22表 簡易水道施設の現況

(昭和49年3末日現在)

区 分	簡 易 水 道					
施 設 名 (水 系 別) ＜創 設＞	合 計	相野地区 (武庫川) S 36.3.31	広野地区 (青野川) S 34.2.24	池尻地区 (貯水池) S 33.3.20	鈴鹿地区 (羽束川) S 33.3.23	沢谷地区 (地下水) —
給 水 能 力 m^3/B	1,224	590	420	100	54	60
給 水 人 口	5,978	3,100	2,100	343	335	100
給水戸数(戸)	1,224	650	407	67	70	30

資料：水道課

めない停滞の様相に、市制施行以来10数年を過してきたものといえる。しかし、鉄道や道路などによる環境条件の整備とともに大きな変革の時期にさしかかっていることは事実であろう。

結 び

このような三田市が今度どのような進路をとり、その道を歩んでいくかは甚だ注目されるところである。近年の都市化の進展は著しく、大都市の膨脹発展は留まるところを知らぬかに見え、大都市圏の周縁地域に及ぼす影響は好むと好まざるとに拘らず甚だ大きなものがあつた。しかし、余りの膨脹発展はさまざまな環境破壊や公害をもたらし、交通難や相つぐ事故に自己矛盾を露呈した面も少なくなかった。しかも最近の経済事情の急激な変化により、開発や建設関係の展開は大きなブレーキがかかり、無秩序な膨脹の施策は大きな反省が求められる事態となっている。

こうした諸情勢にも拘らず、三田市は大都市近郊に位置し豊かな自然と無限の

可能性をもっているのか、阪神都市圏の影響は依然として強大であり、今後どのような展開をみせていくのか、重大な岐路に立たされているといえる。自立的な田園都市として内陸の中核としての役割を果たしていくのに留まるのか、あるいは阪神都市圏に包摂されてベッドタウン化していくのか、大いに関心の持たれるところである。

既に行政的にはさまざまな地域開発の計画がもたれ、その一部は着々と実現の歩を進めているものもあり、今後の三田市の変貌はいずれにしても避けられぬものというべきであろう。三田市総合計画基本構想に盛られているような、自然環境との調和のとれた豊かな人間的な文化環境の実現こそは、いかなる場合においても最も重要な課題であろう。

註

- (1) 三田市史上巻, 三田市史下巻 昭和40年3月 ふるさと三田第4集 昭和45年9月
- (2) 天智天皇の勅命によるとも伝えられる。
- (3) ふるさと三田第1集 昭和48年3月
- (4) 有馬郡志上・下 昭和4年9月
- (5) 三田市史下巻
- (6) 三田市史上巻
- (7) 三田市史上巻 昭和39年12月, 市政要覧各年, 市制施行15周年記念便覧など。
- (8) 三田市史上巻
- (9) 兵庫地理17号「三田都市生活圏調査」昭和48年3月
- (10) 三田市統計要覧 昭和48年
- (11) 兵庫県新誌 上月順治 昭和25年
- (12) 昭和41～46年 累年値 34.6度 最高 36.5度 末野観測所資料
- (13) 昭和41～46年 累年値 10.5度 最低零下 11.2度 末野観測所資料
- (14) 昭和41～46年 累年値 1472mm 最高 1558mm 最低 1392mm
- (15) 三田市史上巻
- (16) 三田市市民課資料
- (17) 三田の地誌 中谷一正 昭和42年
- (18) 三田市統計要覧
- (19) 三田市農林課資料
- (20) 三田市史上巻
- (21) 兵庫地理17号「三田都市生活圏調査」

- ②② 吹田一下関間 昭和50年県下開通
- ②③ 近畿圏基本整備計画 昭和46年8月5日
- ②④ 県勢振興計画 昭和45年3月
- ②⑤ 三田市総合計画基本構想 昭和47年7月
- ②⑥ 北摂ニュータウン計画の概要(三田市企画課), 北摂・北神ニュータウン(日本住宅公団),
三田市政要覧 など
- ②⑦ 兵庫地理17号「三田都市生活圏調査」